

航空事故調査報告書

日本航空株式会社所属
ボーイング式747-200B型JA8122
公海上空
昭和62年4月26日

昭和62年9月30日

航空事故調査委員会議決

委員長	武田	峻
委員	薄木	正明
委員	西村	淳
委員	幸尾	治朗
委員	東	昭

1 航空事故調査の経過

1.1 航空事故の概要

日本航空株式会社所属ボーイング式747-200B型JA8122は、昭和62年4月26日、同社の定期15便としてバンクーバー国際空港から新東京国際空港へ向けて飛行中、北緯54度30分、西経134度00分付近上空の同機内において、旅客1名が病死した。

1.2 航空事故調査の概要

1.2.1 事故の通知及び調査組織

航空事故調査委員会は、昭和62年4月26日、運輸大臣から事故発生の通報を受け、当該事故の調査を担当する主管調査官を指名した。

579001

1.2.2 調査の実施時期

昭和62年4月27日 事実調査

2 認定した事実 及び 3 事実を認定した理由

JA8122は、旅客327名(幼児5名を含む。)、乗員23名(運航乗務員5名、客室乗務員18名)が搭乗し、バンクーバー国際空港を26日07時27分(日本標準時、以下同じ。現地時間は25日15時27分)離陸し、巡航高度31,000フィートで新東京国際空港へ向け飛行中、08時40分ごろ、女性旅客の容態が急変したので酸素吸入を行いたい旨付添人から客室乗務員に連絡があった。

当該旅客(カナダ国籍のフィリピン人、72歳)は肺癌と診断されており、航空機による旅行は酸素ボトルを隣席に準備したうえでの搭乗を医師から許可されていた。酸素ボトルは必要などきのみ使用される予定で、付添人(同人の娘でフィリピン人)から申し出ることとなっていた。客室乗務員は、同旅客に対し直ちに酸素吸入を行うとともに脈拍を測ったがほとんど反応がなかったので、機内放送で医師及び看護婦の助力を求めた。直ちに1名の医師から援助の申し出があり、08時45分ごろ旅客を診断したところ死亡が確認された。

付添人の希望により、同機は飛行を継続し、17時22分新東京国際空港に着陸した。

着陸後の当該旅客の死体検案書によると、死因は肺癌であった。

4 原因

本事故は、飛行中に旅客が肺癌により病死したものと認められる。

579002